

藤原宮朝堂院東第三堂の調査

飛鳥藤原第132次調査 現地説明会資料





東宮一合(東123号遺構) 東宮一合



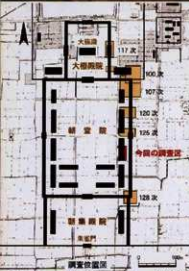
東宮二合(東123号遺構) 東宮二合



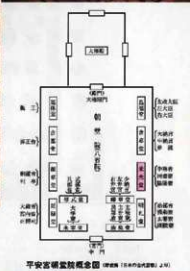
東宮三合(東123号遺構) 東宮三合



東宮四合(東123号遺構) 東宮四合



奈良宮跡(東123号遺構) 奈良宮跡(東123号遺構)



平安宮遺構院概念図 (東123号遺構) 平安宮遺構院概念図 (東123号遺構)

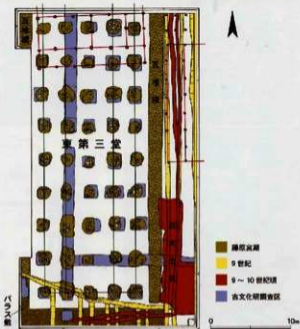
調査の経緯 藤原宮は持統8年(694)から和銅3年(710)までの16年間、持統・文武・元明3代の天皇にわたって営まれた宮殿です。藤原宮の中心部には、周囲に巨圍をめぐらせ、巨大な建物が何棟も並び並ぶ広大な空間がありました。大極楽院・朝堂院・朝儀殿院です。これらの地区は、従前に日本古文化研究所(以下、古文化研)によって発掘されていますが、柱の想定位置をわらった部分調査であったため、築物構造の概要など不明な点が多くありません。そこで奈良文化財研究所では、1999年以降、中新館の再発掘をおこなっており、今回はその7回目となります。

朝堂院 調査地は、国家的な政務や儀式・饗宴の場であった新堂院地区です。藤原宮の朝堂院は、東北約320m、東西約235mに及び、諸宮で最大規模

を誇りました。内部には12棟の調査が東西対称に並んでおり、東朝三堂の南半部を現在発掘中です。平安時代の史料によれば、東朝三堂は「水光堂」と呼ばれ、平賀堂・徳善堂・徳勝堂に属する役人の権が設けられるとあります。
東朝三堂 古文化研の調査によって、建物の規模は南北15間(1間14尺で約62m)、東西4間(1間10尺で約12m)と復原されていました。耳瓦境右延ち建物で、階根は石敷葺です。今日の調査では、南9割分(約37m)を復元しました。東西の柱間は古文化研の想定とはやや異なり、身舎は10尺(約3m)ですが、室は9尺(約2.7m)となります。礎石はすべて抜き取られていますが、それを据えるための礎石や礎石が良好な状態で残っていました。礎石にも礎石保存溝跡があり、床面下の建物で



東朝三堂



あった可能性が高まりました。

基礎の周囲は緩やかに下降しており、バラスが敷かれていました。とくに南側は設けられていません。基礎の外周には帯状に瓦が埋め込んでいますが、これは建物の解体時に不要な瓦を廃棄したものと考えられます。

朝堂の規模 これまで藤原宮の朝堂の規模は、古文化研の想定や平城宮の状況などから、第一堂が最も格式が高く、第二堂以下と格差があるといわれてきました。しかし今回の調査により、第二堂と第三堂の間にも建物の規模の違いがあることが新たに判明しました（第二堂は南北15間、東西5間）。東第一堂・東第二堂は、国政を審議する大臣や大納言・中納言・参議の着席する場であった

ため、第三堂以下と格差をつけたのでしょう。

平安期の遺構 藤原宮期の東第三堂以外に、平安時代の建物や溝・土坑状の遺構を多数検出しました。藤原宮は完結後、一部は荘園となることが知られており（宮前庄、萬原庄、飛騨庄など）、今回の調査区内に荘園の管理施設が置かれていた可能性もあります。

出土遺物 出土量の大半を占めるのは、東第三堂に葺いた瓦と、9～10世紀の上層です。土器のなかには「思置」と記された土師器や、縁輪・灰輪陶器もありました。また、皇統十三歳の7番目「長年天皇」（延暦元年<848>初崩）10枚が疑いに返された形のまま出土しています。

2004年3月